

第1回地域連携専門委員会 議事概要

- 開催日時 平成29年6月21日(水) 13:30～15:40
- 場所 長野県庁 3階 特別会議室
- 出席者
委員 阿部委員、石川委員、伊藤委員、杉原委員、橋本委員、松本委員、水原委員、武捨委員
関係者 善光寺 若麻績宮繕部長、長野市 池田公園緑地課長
長野県 青木県民文化部長、中坪文化政策課長、荒城施設課長、日向信濃美術館 整備室長、高山信濃美術館整備室課長補佐

【委員長、委員長代理の指名】

- 委員長 橋本委員(長野県信濃美術館 館長)
- 委員長代理 松本委員(信濃美術館整備担当参与)

【新美術館整備へのアドバイス等】

- 長野市の一番の観光拠点は善光寺。善光寺と美術館が連携した賑わいづくりができるとうい。
- ナイトミュージアムや休館日の貸切など、通常の営業時間以外の活用を検討してはどうか。
- 金沢21世紀美術館は、無料で見られるスイミング・プールなどの造形があり、訪れる人が多い。フリーゾーンに目玉があると集客につながる。
- 基本構想にある「人本位」の美術館を実現するには、今まで以上の予算措置が必要。
- 県内各地の美術館が地域の文化センター的な役割を果たしてほしい。信濃美術館がそのネットワークの要になってほしい。
- 県内在住のアーティストの拠り所になってほしい。next(信州新世代のアーティスト支援事業)に加えて何か違う方法もあるのではないか。
- 今後もマスコミとの共催展は必要だが、学芸員のモチベーションの保持やスキルアップのためにも、独自の企画展にも力を入れてほしい。
- やる気のある学芸員が定着できる見直しをすることが、将来の美術館をつくっていく上では大事。
- 今のアートはかつてのようなジャンルに分けられていない。そういう時代の美術館のあり方は難しいが、最近の信濃美術館の動きを見ていると、今までの地方の美術館とは違う美術館をつくってくれるのではないかと期待している。
- 北信地域以外の人には、信濃美術館は身近に感じてもらえていない。作家の立

場とすれば、いつか信濃美術館で展覧会をやりたいと思えるような空間になってほしい。

- 北信地域以外にいと信濃美術館の広報活動が弱く思える。
- ハード面もさることながら、ソフト面に力を入れることにより、遠方の人にも足を運んでもらえる美術館になるのではないか。
- 新美術館は昔の名画を飾るだけではなく、今、生きている作家が関わって場をつくってけるとよい。
- 美術館の箱を開いていくことと、美術館の周りが魅力的な場所なので、そこまで含めた美術館の動きとしてプロジェクトを展開し、市民や観光客、アーティストが連携した、ここでしかできない新しい美術館の形を模索してほしい。
- 美術館自体をどのようにテーマ化するか。隣にある善光寺からの動線、物理的な空間としてどのような物語を描くか。ランドスケープの他に、サウンドスケープ、スメルスケープなど五感で感じるものも含めて考えるとよい。
- 建物内のサインは分かりやすいものがよい。障がいがある方も一人で自立して鑑賞できるような仕組みがあるとよい。
- 障がいがある方は経済的な問題を抱えている人が多く、なかなか文化的な活動に参加できない。その反面、文化芸術にすごく興味があり、癒されている人もいる。そういう人達の居場所になることで多様性のある空間になる。どうやったら居心地のよい空間をつくっていただけるかを考えるとよい。今、ショッピングモールが一番安心で安全で安くて、いつまでいてもよい空間になっている。美術館が人の集う憩いの場所になるとすばらしい。
- 絵が描けないけど美術が好きな人、美術は嫌いと思っているが触れたことがない人など様々な人がいると思う。芸術がもつ祝祭のような力で一緒に乗り越えていく仕組みがあったらよい。トライ&エラーを一緒に繰り返していただける美術館になるとよい。

【美術館と地域との連携】

- アウトリーチの充実には人材が必要。学芸員だけではなく、アートナビゲーターなどの養成が全県下でできないか。各地域のアートナビゲーターが信濃美術館と協力して地域で活動することにより、信濃美術館と各地域が関わることができる。
- 美術館があることが地域の魅力になるような、お互いの関係づくりが必要。
- 県内各地では様々なアートフェスが開催されている。アート情報を一括して県が観光情報と併せて発信できるとよい。
- 地域に暮らしている人が無意識に持っているイメージをアーティストの感性や技術力で表現することに新しい可能性を感じる。そういうことができる美術館

になれば素晴らしい。

- 長野駅に降りて、善光寺を通過して美術館に行くまでの地域の雰囲気や魅力があれば、持続的な集客につながる。
- 障がい者福祉施設がアールブリュットや障がいがある人も含んだ多様な表現をテーマに扱う美術館を全国で立ち上げている。福島の「はじまりの美術館」では建設の段階から地域住民が参加しており、実感を伴って鑑賞してもらえる施設になっている。
- ボランティアの延長線上で、各地域のキーパーソンに美術館に協力してもらい、美術館の機能を地域に持ち出して活動・発信することにより、ネットワークが広がれるとよい。

【県民の気運醸成】

- 東京オリンピックに向けて、東山魁夷館のリニューアルオープンと連携して、海外の観光客にPRしていけるとよい。
- 未来につながる美術館なので、若い世代や子育て世代に信濃美術館の改築を知ってもらいたい。SNSの活用や、行政の直接的な情報発信ではなく、民間のアート情報を出しているところと連携すると、今、情報が届いていない部分に伝わるのではないか。
- インドアビューを使って美術館内のバーチャルツアーができると美術館に出かける前の予習ができて、PRにもなるのではないか。
- 「松本ウィーク」や「上田ウィーク」など各地域に関連した企画展を開催することにより、その地域の人に興味を持ってもらえるのではないか。
- 美術館が解体されて建物がない時期だからこそ、地域に積極的に出かけてプロジェクトを展開するとよい。各地域の人たちへのPRになる。
- 生活の中に美術館があると自分達の美術館という意識が持てる。信濃美術館を中心としたネットワークができると自分達の美術館、我々意識を醸成できる。
- 障がいがある人や高齢者が弱い立場にいる前提で考えてはいけない。一人の人として美術館に参加することをどうやってつくるかを考えていかなければいけない。インクルーシブな関わり方がどうすればできるか考えていきたい。

(以上)